皇室文化百科 いけはな

青山御流

皇室文化百科　いけはな

青山御流

花のいのち、清らかなこころ 神に捧げる王朝の花

和歌、雅楽、蹴鞠と日本の伝統文化が宮廷を中心に花開いた平安・王朝時代。青山御流は王朝文化華やかなりし鎌倉時代初期の承元4年（1210）に、側近として時の天皇のそばに仕えた園基氏を流祖とする華道である。以来、800年、園家では王朝のこころを伝える花を相伝し、今に継承してきた。皇室ゆかりの花として、仏教の供花から始まったとされる他の多くの流派とは一線を画する青山御流の花を家元のインタビューとともに紹介する。

写真提供／青山御流　撮影協力／聖心女子大学　撮影／大谷英樹、山川修一（本誌）　取材・構成／岡田尚子（本誌）

青山御流において、榊は家元のみが活けることを許されている特別なもの。活ける前に、家元は一葉一葉をきれいに浄める。花器は「神器八掛筒」と名づけられた高さ1尺2寸、周囲も1尺2寸の八角形。1尺2寸は12か月という時間を表し、八角形の八面は方位と空間を表す。時空を表す花器に御幣をかけて活けられた榊は、神が降りておられる姿そのものである。神前に献ずる際には常に新たな花器に活けるという。花の形は極真の体。作者／家元　花器／神器八掛筒　花台／八足案　花／榊　撮影場所／パレス2階　床の間

園　基信（号・楽山）

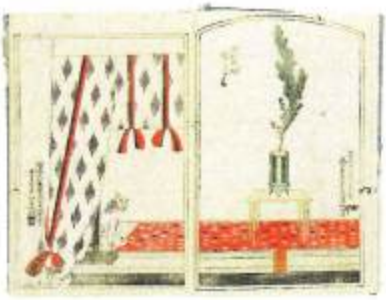
昭和20年、東京生まれ。武蔵野美術大学卒業。25歳より華道修行の後、昭和53年、日本で唯一、王朝華道の流れを伝える青山御流の28世家元を継承する。出雲大社や明治神宮に神前での献花式を行うなど、公家文化の再興に尽力している。著書に『青山いけはな写真集』、『青山御流活花手引種　前編・後編』（復刻版）、写真集『花微笑』など。平成元年に昭和天皇大喪儀斎宮、平成2年に即位式および大嘗祭に関する諸儀式の装束掌典として宮中祭祀に奉仕、現在も装束掌典を務める。

青山御流の花についてお話しする前に、まずは園という家についてご説明いたしましょう。園家は藤原不比等の次男、藤原房前を祖とする藤原北家の流れで、代々、宮中で大納言、中納言、参議などの官職に就いて帝をお支えしておりました。藤原道長から7代後に生まれた基氏（1210-82）は、側近として仕えていた後堀河天皇が23歳で崩御され、出家することになりました（103ページに北家系図）。園家古文書『青山記』には、「初代基氏卿は風雅の道をきわめられ、代々園家相伝とし、仏に花を手向け、神に花を献じ、家々の習わしとした」とあります。ゆえに青山御流では基氏（号は楽山）を流祖としています。

当時、日本に「生け花」というジャンルの文化があったわけではありません。この世のありとあらゆるいのちは天と地の自然の恵みをいただいて生を得ていますが、自然の恵みや豊かな四季がある一方、苛烈な自然災害にも見舞われる日本では、いのちの輪郭がくっきりとしています。宮中で祭祀や皇室行事に奉仕してきた園家代々

青山御流では三本の枝で天・人・地を表すのを基本とする。天の枝は太陽や雨など天からの恵みを表す。最も生命力が強く、すっと伸びた枝を用い、枝先が必ず正中(中心)をとるように活ける。人の枝は天と地の間に生きるものすべてを表し、地の枝は大地の恵みを表す。この作品は行の体。活けられているのは、光格天皇が愛でられた「鷺の尾」という杜若(かきつばた)。花びらの白と紫のコントラストが非常に美しい。作者／家元　花器／北白川宮家よりいただいた白磁瓶　花／杜若(鷺の尾)　撮影場所／パレス1階　元紀殿下の御化粧の間

園家文書『大極之巻』より。右ページ中央に「大極之一気　草木発生之図」と題された図がある。家元はこの図を見て、28世を継ぐことを決意した



園家文書『青山御流活花千瓶図式』より真の体で活けられた五葉松と菊の図。幕末期に朝廷御用絵師として活躍した原在照(はらざいしょう)画

園家文書『青山御流活花千瓶図式』より行の体で活けられた杜若の図

園家文書『青山御流活花千瓶図式』より草の体で活けられた蘭の図。

決めました。

花を継ぐと決心してからは、青山御流の歴史をすべて見直し、他の流派の勉強もしました。その結果、青山御流の花として一番大切なものだけを表現しようと、花の姿を初代基氏から伝わる「生命感」を大切にした考え方と形に戻しました。私が基氏の号をいただいて「楽山」と名乗ることにしたのも、初心に戻ろうとの気持ちからです。

青山御流の基本形には真(しん)・行(ぎょう)・草(そう)の三体があります。これはひとつのいのちの誕生から死までを三つに分け、それぞれの意味を考え、その時々の美しさを表現したものです。「真の体」は出生(しゅっせい)の美を表し、草木が発芽してすくすくと上に伸びる若い時分の姿、つまり「若いときの素直でまっすぐな美しさ」を意味します。「行の体」は成長の美を表し、「真の体」が時を経て花を咲かせ、実をつけ、種を落とす様子、つまり「最も成長力のあるときの美しさ」を意味します。そして「草の体」は存在の美を表し、「行の体」がさらに時を経て、風雪に耐えて、種として最大に成長したときの姿、つまり「存在感に満ちた美しさ」を意味しています。これら真・行・草にそれぞれ三体があり、あわせて九体の基本形があります。現在、お稽古ではこの三体を順に学んでいきますが、花の清らかないのちが輝くように活けていくのはどの体でも同じで

す。

青山御流は私で28代を重ねてまいりました。それぞれの時代の家元は、自分が生きた時代ならではの要素を取り込んできましたが、その要素には次代では不必要なものもあるかもしれません。不必要と判断されたものは、世代のフィルターで濾過されます。つまり、今の青山御流は27枚のフィルターを通ってきた清流なのです。そこに流れているのは、現在しか通用しないものではなく、800年にわたって継承されてきて、今後も継承されていくであろう本質です。それがおそらく「清らかさ」ではないかと私は考えています。

青山御流の花は皇室の「清澄さ」から生まれた

この清らかさは皇室文化そのものだと思います。私が青山御流と皇室とのゆかりを強く感じたのは、43歳のとき、昭和天皇の大喪の礼の折に祭官として奉仕させていただいたときのことでした。初代の基氏以降、園家代々の人々が宮中で体験していた宮中祭祀を通して、皇室がいかに「清澄さ」を大切にしているかということを私自身が実感したとき、「青山御流の花はここから生まれたのだ」とごく自然に思いました。それまで頭でしか理解していなかった青山御流の本質を初めてこころから理解できたのです。

青山御流の花を最もよく表しているのが榊であることも、青山御流と皇室との関わりをよく示しています。古来、榊や松などの常緑の木は、祭祀の際には神の降りてこられる依代として用いられました。神前に花を捧げる献花の儀式は他の流派でも行われていますが、榊に御幣、紙垂を掛けて献ずるのは当流だけであることから、日本古来の神まつり、祭祀の姿をとどめているように思います。この点で仏教の供花から起こったとされる他の流派とは大きく異なっているのです。

ですから青山御流の花は清らかな気持ちで活けてほしい。その一助として、私は会報誌『らくざん』の冒頭に毎号、青山御流心得として「風雅の道は正道を守る事」との言葉を載せています。見栄を張ったり、目立とうと思ったりといった邪な気持ちはちょっと脇に置き、清く明るくやさしいこころで活けると、おのずから風雅の道に至るというわけです。

花には活けた人の人柄が出ます。見栄や欲といった邪な気持ちも隠せません。でも、おもしろいのは、たとえそのような気持ちがあったとしても、花を活けている間に、荒れたこころが静まってくるのです。美しい花を手にして夢中になって活けていると、花のエネルギー、美のエネルギーが周りに満ちてくる。こころと脳が美によって活性化される。つまり、花を活けるということは、その人の心持ちが花に反映するだけでなく、花の力がこころに影響を及ぼし、その人本来の美しさ、個性が花の力によって引き出される相互作用でもあるのです。生け花とは、花という自然の最も美しい部分と、人のこころのなかで最もきれいな部分が重なって生まれるものなのです。

皇室から生まれた唯一の花、青山御流の花を守っていくことは私の使命と考えています。

東京では霞会館（千代田区）でお稽古が行われている。約2時間のお稽古は、生徒さんの作品を家元、副家元が講評し、手直しするという手順で進む。お稽古は初心者から師範の免状を取得した人まで、さまざまな力量の人が一緒に行われるが、みな、一様に「家元が手を入れてくださると、花の生命力が増し、花がいきいきと輝きだす」と話す

香淳皇后のご実家 旧久邇宮邸

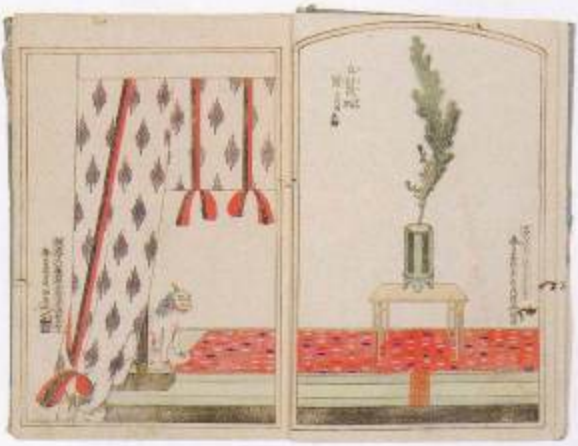
久邇パレス（御常御殿）の外観。現在は聖心女子大学の学生らの茶道・華道・書道・日舞などの稽古場として利用されている　撮影／山田耕司（本誌）

皇后陛下の母校として知られる東京・広尾の聖心女子大学。同大学のキャンパスはかつて香淳皇后のご実家、久邇宮家の宮邸のあった場所で、現在もその一角に「久邇パレス」と呼ばれる2階建ての木造建築がある。香淳皇后のご両親である久邇宮邦彦王・俔子妃両殿下の日常生活の場として大正13年に建てられた「御常御殿」である。

今回の撮影はこの「御常御殿」と「別棟」で行われた。伸びやかな榊の姿がよく映える白壁の床の間、山法師の落ち着いたたたずまいを浮かび上がらせる障子越しの柔らかい光、黄菊と松の晴れやかさに似つかわしい鶴の杉戸絵……。皇室ゆかりの青山御流の花の撮影場所として、香淳皇后もお住まいになられたこの建物ほどふさわしい空間はない。

ちなみに香淳皇后はご成婚当日の大正13年1月26日、宮邸本館の車寄から十二単姿で宮中へと向かわれた。宮邸本館はその大部分を焼失したが、車寄を含む正面玄関はほぼ完全な姿で残っている。

園家文書『大極之巻』より。右ページ中央に「大極之一気　草木発生之図」と題された図がある。家元はこの図を見て、28世を継ぐことを決意した



園家文書『青山御流活花千瓶図式』より
真の体で活けられた五葉松と菊の図。
幕末期に朝廷御用絵師として活躍した
原在照（はらざいしょう）画

園家文書『青山御流活花千瓶図式』より
行の体で活けられた牡丹の図

園家文書『青山御流活花千瓶図式』より
草の体で活けられた葉蘭の図。

作者／副家元　花器／菊花紋花瓶　花／
萱草（かんぞう）　撮影場所／パレス2階
火灯窓

皇室文化百科 いけはな

青山御流

この小冊子の初出は扶桑社ムック「皇室 Our Imperial Family」第51号に掲載された記事です。